

研 究

食育における体験学習を保護者と
連携するための課題木原 章裕¹⁾, 川崎 裕美²⁾, 森脇 智子²⁾

〔論文要旨〕

本研究は、食育のための体験学習を行った子どもの保護者における体験学習のとらえ方の実態を明らかにし、保護者と連携するための課題を検討することを目的とした。その結果、体験学習の内容は、家庭で話題となり、実践されていることが明らかになった。子どもの学年によって家庭での体験学習の話題や実践には差があり、子どもの学年によって保護者の指導内容も組み立てる必要性が示唆された。保護者が食育として望んでいることは、規則正しい食生活や調理ができるという食に限定されたことであり、保護者と連携するには、食育は食を通じた健康増進活動であり、家庭での実践にねらいがあると伝えることが課題であると考えられた。

Key words : 食育, 児童, 保護者, 体験学習

I. はじめに

子どもが生涯を通じて自らの健康を管理し、実践できることを目指した取り組みが行われている¹⁾。そのなかでも食は、子どもの生涯にわたる健康を支える重要なものであり、幼少期からの体験が生涯の基本となると考えられているため、食育として重要視されている²⁾。

農業は、「農作業」、「食材」、「調理」という連続した食への関心を高め、自ら健康の保持・増進の方法や正しい食習慣を身につけることができる³⁾、食育に体験学習として取り入れられている。食育基本法が制定され、食育推進計画にも農業体験活動等の機会の拡大を盛り込んでいる自治体も多い⁴⁾。今後、農業の体験学習を実施する学校は増加すると考えられる。

食育のめざすところは、よりよい食の実践ができることである。子どもの習慣は家庭における保護者の態度や家庭環境に影響を受けるため⁵⁾、保護者への指導も必要とされている⁶⁾。食育の実践においても、学校だけでなく、保護者と連携することが必要である⁷⁾。食育として、農業の体験学習を行った場合にも、保護者が子どもの学習したことを実践することは重要である。

そこで、本研究では農業の体験学習を行った子どもをもつ保護者を対象として、家庭での実態を明らかにし、保護者と食育を連携して行うための課題を検討した。

Subjects of Working in with Guardian for Activity of Food Promotion Learning of Preferable Lifestyles for Children

Akihiro KIHARA, Hiromi KAWASAKI, Satoko MORIWAKI

1) 広島大学大学院保健学研究科 (学生)

2) 広島大学大学院保健学研究科 (研究職)

別刷請求先: 木原章裕 広島大学大学院保健学研究科 〒734-8551 広島県広島市南区霞1-2-3

Tel : 082-257-5395 Fax : 082-257-5399

[2059]

受付 08. 7.31

採用 09.12.13

II. 研究方法

1. 調査対象

調査対象は、平成18年度先駆的食農教育支援事業を実施した小学校4学年、5学年、6学年の269名の保護者である。

先駆的食農教育支援事業は、農作業、学校給食・学級活動・保護者活動・授業での調理、試食、収穫祭での学習成果の発表であった。収穫祭まで保存ができない野菜は、収穫後に食生活改善推進委員・女性会の協力を得て、調理と試食を行った。

内容は畑の使用時期や教科学習を調整し決定された。前期には4学年が夏野菜を、後期には6学年が冬野菜を栽培した。5学年は通年で稲作を行った。各学年の保護者調査は、体験学習の前と学年の計画が終了した後1か月以内に実施した。体験学習の学年別内容と保護者の調査時期を表1に示した。本研究では「農作業」、「食材学習」、「調理」という一連の活動を食育の方法ととらえ、体験学習とした。

調査対象が居住する地区は、面積16.8km²、瀬戸内海に面した山地の裾野にある。総人口10,138人のうち20歳未満の人口は20.0%、65歳以上の人口は20.7%である。農業人口の割合は0.6%であり、商業地域として位置づけられている。

2. 調査および分析方法

保護者への質問紙の記載依頼、配布・回収は、子どもを通じて行った。無記名の調査用紙の提

出によって研究協力に対する同意とした。保護者の食への関心や食生活に対するとらえ方を体験学習前後および子どもの学年別に、 χ^2 検定によって検討した。解析には、SPSS ver14.0jを使用した。

III. 結果

1. 分析対象

回収率は体験学習前77.0% (207名)、体験学習後72.1% (194名)であった。回答した保護者の性別は、体験学習前で女性193名、男性12名 (不明2名)であったため、分析対象は女性とした。体験学習後の分析対象は女性181名とした。

2. 家庭での話題の変化

家庭内での話題の実態を「食生活について話すか」、「農業について話すか」という質問で調査した。

「食生活について話す」と回答した保護者の割合は、体験学習前は161名 (83.4%)、体験学習後は144名 (81.8%)であった。体験学習前から保護者は、食生活について家庭で話題になっていると認識していた。

「農業について話す」と回答した保護者は、体験学習前は66名 (34.2%)、体験学習後は86名 (47.6%)であった。体験学習後、「農業について話す」保護者の割合は表2に示したように有意に増加していた。

表1 子どもの農業体験の流れと時間数および保護者調査時期

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
4学年	とうもろこし カボチャ トマト きゅうり	畝作り 2時間 苗植え 2時間	草取り 2時間	草取り 2時間 収穫 2時間	収穫 2時間 調理・試食		試食		
		保護者調査			保護者調査				
5学年	稲	田植え 4時間	草取り 2時間	草取り 2時間	草取り 2時間	稲刈り 4時間 脱穀 2時間 精米 2時間	調理・試食		
		保護者調査						保護者調査	
6学年	大根 白菜 広島菜 ねぎ じゃがいも				畝作り 種まき 4時間	間引き 草取り 2時間	草取り 2時間 収穫 2時間 調理・試食 (収穫祭)	収穫 2時間 試食	収穫 2時間 試食
					保護者調査				保護者調査

表2 子どもの体験学習前後の保護者の回答

		体験学習前 (%) n=193	体験学習後 (%) n=181
食生活について話すか	はい	161(83.4)	144(81.8)
	いいえ	32(16.6)	32(18.2)
農業について話すか	はい	66(34.2)	86(48.6)
	いいえ	127(65.8)	91(51.4)
子どもと料理を作るか	はい	106(54.9)	97(55.1)
	いいえ	87(45.1)	79(44.9)
食事の支度を手伝わせるか	はい	120(63.8)	140(79.5)
	いいえ	68(36.2)	36(20.5)
野菜料理を作るか	はい	167(88.8)	169(96.0)
	いいえ	21(11.2)	7(4.0)

(* p<0.05, ** p<0.01)

3. 生活の変化

「子どもと料理を作るか」、「食事の支度を手伝わせるか」、「野菜料理を作るか」を日頃の食生活の実態として質問した。

「子どもと料理を作るか」は、106名 (54.9%) の保護者が作ると回答し、体験学習後は97名 (55.1%) であった。

「食事の支度を手伝わせる」と回答した保護者は、体験学習前には、120名 (63.8%) であった。体験学習後では140名 (79.5%) であった。体験学習後に「食事の支度を手伝わせる」保護者は増加していた。

「野菜料理を作る」は、体験学習前には167名 (88.8%), 体験学習後は169名 (96.0%) であった (表2)。

4. 子どもの学年別保護者回答の変化

体験学習前後で保護者の回答に有意な差が認められた「農業について話すか」、「食事の支度を手伝わせるか」、「野菜料理を作るか」について、子どもの学年別に前後の変化を検討した (表3)。

4 学年の保護者では、体験学習前は15名 (27.8%) が「農業について話す」と回答した。体験学習後は28名 (50.9%) が「農業について話す」とした。体験学習後に「農業について話す」保護者が有意に増加した。

5 学年と6 学年の保護者では、「食事の支度を手伝わせるか」の質問で体験学習前後に有意な差が認められた。5 学年では、体験学習前は

表3 子どもの学年別保護者回答の変化

学年		体験学習前	体験学習後
4 学年の保護者	農業について話すか	はい 15(27.8)	28(50.9) *
		いいえ 39(72.2)	27(49.1)
		計 54(100.0)	55(100.0)
	食事の支度を手伝わせるか	はい 34(65.4)	41(75.9)
		いいえ 18(34.6)	13(24.1)
		計 52(100.0)	54(100.0)
5 学年の保護者	野菜料理を作るか	はい 45(86.5)	52(96.3)
		いいえ 7(13.5)	2(3.7)
		計 52(100.0)	54(100.0)
	農業について話すか	はい 22(38.6)	26(54.2)
		いいえ 35(61.4)	22(45.8)
		計 57(100.0)	48(100.0)
6 学年の保護者	食事の支度を手伝わせるか	はい 40(70.2)	43(87.8) *
		いいえ 17(29.8)	6(12.2)
		計 57(100.0)	49(100.0)
	野菜料理を作るか	はい 53(93.0)	48(98.0)
		いいえ 4(7.0)	1(2.0)
		計 57(100.0)	49(100.0)
6 学年の保護者	農業について話すか	はい 29(35.4)	32(43.2)
		いいえ 53(64.6)	42(56.8)
		計 82(100.0)	74(100.0)
	食事の支度を手伝わせるか	はい 46(58.2)	56(76.7) *
		いいえ 33(41.8)	17(23.3)
		計 79(100.0)	73(100.0)
6 学年の保護者	野菜料理を作るか	はい 69(87.3)	69(94.5)
		いいえ 10(12.7)	4(5.5)
		計 79(100.0)	73(100.0)

(* p<0.05)

40名 (70.2%) が「食事の支度を手伝わせる」とし、体験学習後は、43名 (87.8%) であった。6 学年は、体験学習前は46名 (58.2%), 体験学習後は56名 (76.7%) であった。

「野菜料理を作る」ことには、学年による有意な変化は認められなかった。

5. 子どもから保護者への伝達

保護者が子どもから体験学習について話を聞いたか、さらに、体験学習に関する子どもから聞いた内容について検討した。子どもから聞いた内容は、「楽しかった」、「野菜や米について知ることができた」、「農家の苦労がわかった」、「食物を大切にしないといけない」、「疲れた」、「楽しくなかった」の6項目のうち該当するも

表4 子どもの学年別体験学習の会話の有無

		はい (%)	いいえ (%)	計
子どもは体験	4 学年	49(89.1)	6(10.9)	55
学習の話をし	5 学年	45(95.7)	2(4.3) **	47
たか	6 学年	54(72.0)	21(28.0)	75

(** p<0.01)

のに丸をする質問とした。

体験学習について家庭で子どもが話したと回答した保護者は148名(83.6%)であった。学年別の保護者数を表4に示した。4学年と5学年の保護者は、「話をした」と回答した者が有意に多かった。

148名が聞いた話の内容は、「楽しかった」が最も多く115名(77.7%)であった。115名のうち48名が4学年の保護者であった。「野菜や米について知った」と話したとした保護者は73名(49.3%)であった。5学年が最も多く、28名であった。「疲れた」は68名(45.9%)で、5学年が27名であった。

6. 食育における子どもに期待すること

保護者の期待を、体験学習前後で比較した。子どもが食に関して身につける必要があると考えることを図1に示した8項目から保護者が選択して回答した。体験学習前に選択された最も多い項目は、「規則正しい食生活ができる」160名(86.0%)であった。次いで、「自然や食べ物への感謝の気持ちを育む」143名、「簡単な料理であれば自分で作る」131名、「健康の自己管

理ができる」105名、「体調を自覚できる」96名であった。体験学習後には、「自然や食べ物への感謝の気持ちを育む」が133名(85.3%)で最も多かった。次いで、「規則正しい食生活ができる」131名、「簡単な料理であれば自分で作る」126名であった。「簡単な料理であれば自分で作る」は体験学習後に有意に増加していた。

学年別では、4学年では、体験学習前は「規則正しい食生活ができる」が49名(90.7%)で最も多かったが、体験学習後には、「自然や食べ物への感謝の気持ちを育む」49名(86.0%)が最も多くなった。5学年では、体験学習前に最も多かった項目は4学年と同様に「規則正しい食生活ができる」44名(77.2%)であったが、体験学習後には、「簡単な料理であれば自分で作る」31名(63.3%)が最も多くなった(表5)。

IV. 考 察

1. 家庭の話題と生活実態からの課題

食生活については、体験学習前から家庭で話題にされていた。食生活については、さまざまな場面で取り上げられていることもあり、体験学習前から関心があったと考えられる。「農業について話題にする」、「食事の支度を手伝わせる」、「野菜料理を作る」保護者は体験学習後に増加していた。体験学習で実施した「農作業」は日常で話題となり、「食材学習」、「調理」は実践されるという効果は認められた。

4学年の保護者で体験学習後に有意に増加した項目は、「農業について話す」であった。体

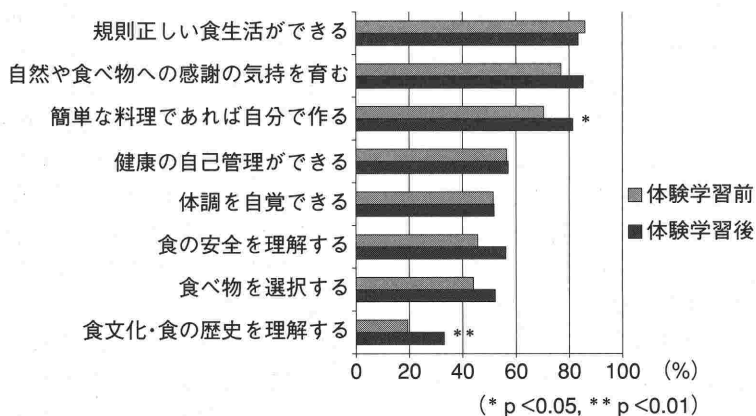


図1 食育における子どもに期待すること

表5 子どもの学年別食育に対する保護者の望み

(体験学習前)			
	4 学年 (%) n=54	5 学年 (%) n=57	6 学年 (%) n=82
規則正しい食生活ができる	49(90.7)	44(77.2)	67(81.7)
自然や食べ物への感謝の気持ちを育む	46(85.2)	41(71.9)	56(68.3)
簡単な料理であれば自分で作る	34(63.0)	37(64.9)	60(73.2)
健康の自己管理ができる	28(51.9)	34(59.6)	43(52.4)
体調を自覚できる	24(44.4)	26(45.6)	46(56.1)
食の安全を理解する	22(40.7)	26(45.6)	37(45.1)
食べ物を選択する	21(38.9)	27(47.4)	34(41.5)
食文化・食の歴史を理解する	10(18.5)	11(19.3)	15(18.3)

(体験学習後)			
	4 学年 (%) n=57	5 学年 (%) n=49	6 学年 (%) n=75
規則正しい食生活ができる	45(78.9)	28(57.1)	58(77.3)
自然や食べ物への感謝の気持ちを育む	49(86.0)	27(55.1)	57(76.0)
簡単な料理であれば自分で作る	39(68.4)	31(63.3)	56(74.7)
健康の自己管理ができる	26(45.6)	16(32.7)	34(45.3)
体調を自覚できる	22(38.6)	13(26.5)	34(45.3)
食の安全を理解する	23(40.4)	19(38.8)	31(41.3)
食べ物を選択する	20(35.1)	17(34.7)	31(41.3)
食文化・食の歴史を理解する	14(24.6)	6(12.2)	19(25.3)

験学習の効果は認められるが、食育への効果があったとは判断しにくい。「農作業」の話題で終わることなく家庭で食の実践をしてこそ、学習効果があったといえる。したがって、保護者に体験学習前から食の実践について指導する必要がある。

5 学年、6 学年では、「食事の支度を手伝わせる」保護者が体験学習後に増加していた。体験学習の話は4 学年、5 学年の保護者において子どもから話を聞いたと回答した保護者が有意に多かった。保護者と連携するための方法として、子どもから保護者への伝達と家庭での実践という点からは5 学年が最も効果があったと考えられる。しかしながら、保護者が子どもから聞いた内容は感想が多かった。現在の実施方法では、食育のねらいは子どもから保護者には正確には伝わっていなかったと考えられる。体験学習を通じて行う食育のねらいを、まず子どもに理解させ、保護者にも伝えるように指導する必要がある。また、子どもが保護者に伝達することと合わせて、学校からも直接伝える必要がある。その内容は保護者指導として一律に行うのではなく、子どもの学年によって変えることも必要である。本研究の結果からは、4 学年の保護者には、食にかかわる実践の機会づくり、5・6 学年保護者には食を通じた健康づくりな

どの指導内容が考えられる。

2. 食育に関する保護者の望みからの課題

体験学習前後で、多くの保護者が「規則正しい食生活ができる」を、子どもに望むこととして選んだ。これに比して、食育を通じて学んでほしいと考える健康の保持・増進に関する「健康の自己管理ができる」や「体調を自覚できる」を選んだ保護者は少なかった。「食文化・食の歴史を理解する」を望むと回答した保護者は、他の項目と比較すると非常に少なかった。食育基本法では学びを期待している項目にもかかわらず、保護者にとって興味を持ちにくい項目と考えられる。しかしながら体験学習後には増加し、体験学習によって、保護者にも食育基本法のねらいが伝わった可能性がある。体験学習後に有意に増加した項目は、「簡単な料理であれば自分で作る」であった。体験学習での「調理」によって保護者の望みが「調理」に関する項目に変化したと考えられる。学年別では、4 学年と5 学年の保護者で前後に望むことの割合が変化しており、体験学習を行うだけでなく、体験学習前にねらいを説明することによって意識が変化する可能性が示唆された。保護者は食育における体験学習を子どもが学ぶことと理解しているため、家庭での食の実践にはつながりに

くいと推察された。家庭での食事に対する配慮や意識は、児童の意識や健康に影響があることが具体的に確認されており⁷⁾、体験学習を食育の方法として用いる場合には、保護者に子どもが体験したことを家庭で実践すること、食育が食にかかわることだけではないことを伝えることが課題である。

V. ま と め

体験学習を行った子どもをもつ保護者を対象として、家庭での実態を明らかにし、保護者と食育を連携して行うための課題を検討した。

1. 体験学習で実施した「農作業」は家庭でも話題となり「食材学習」、「調理」は実践されていたことが保護者への調査から認められた。子どもの学年によって、家庭での体験学習の話題、実践には差があり、子どもの学年進行によって保護者への指導内容を組み立てる必要性が示唆された。
2. 保護者が望んでいることは、規則正しい食生活や調理ができるという食に限定されたことであり、食を通じた健康づくりを生活で実践するという食育の意図を説明することが必要である。

文 献

- 1) 厚生統計協会. 学校保健行政の動向. 国民衛生の動向 2007; 54: 359-369.
- 2) 大森玲子, 山崎久子, 飯田有美, 他. 保育園児の食生活等に関する実態調査. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 2007; 30: 361-368.
- 3) 香川県. 平成18年度農林水産食育推進プログラム開発実証委託事業報告. <http://www.pref.kagawa.jp/nousei/santa/data/0705/070423c.htm> (2009/08/07)
- 4) 内閣府. 平成18年度食育推進施策. <http://www8.cao.go.jp/syokuiku/data/whitepaper/2007/pdf/gaiyou.pdf> (2009/08/07)
- 5) 服部伸一, 足立 正. 幼児の就寝時刻と両親の帰宅時刻並びに降園後のテレビ・ビデオ視聴時間との関連性. 小児保健研究 2006; 65: 507-512.
- 6) 古谷真樹, 山尾 碧, 田中秀樹. 幼児の夜ふかしと主養育者に対する睡眠教育の重要性. 小児保健研究 2008; 67: 504-512.
- 7) 松本晴美. 家庭での食生活環境が小学生の食事, 学校給食に対する意識および健康状態に及ぼす影響. 山梨学院短期大学研究紀要 2007; 27: 26-33.